



多読は効果的である：  
日本の大学英語教育におけるさらなる証拠

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲垣, スーチン, 稲垣, 俊史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005902">https://doi.org/10.24729/00005902</a>

# 多読は効果的である

—日本の大学英語教育におけるさらなる証拠—

稲垣スーチン・稲垣 俊史

## 1. はじめに

豊富で多様な理解可能なインプットは第二言語習得の成功に不可欠である (Krashen, 1985)。しかしながら、日本のような外国語として英語を学ぶ環境において十分なインプットを確保するのはたやすいことではない (Inagaki, 2005)。そこで、近年、学習環境に関わらずたくさんの英語に触れることを可能にする多読 (extensive reading) が注目を集めている (Day & Bamford, 1998; 稲垣・稲垣 2008; 古川・河手 2003; 酒井 2002; Waring, 2000)。稲垣・稲垣 (2008) では、大学における1学期間の教室外での英語多読を取り入れた授業により、英語習熟度テストであるミシガンテストの総得点が有意に伸びたことを示した。さらに、稲垣・稲垣 (2009) では、上記のミシガンテストの伸びをさらにセクション別に分析し、多読の効果は読解だけでなく、聴解や文法にも及ぶことを示した。しかし、稲垣・稲垣 (2008) でも指摘したように、これらの先行研究では、対照群 (多読をしないグループ) が存在しなかったため、観察された効果が教室内の授業活動によるものであった可能性があり、それが多読によるものであったと断定することができないという問題があった。そこで、本論文では、対照群を含めて多読の効果をより厳密に検証し、その結果を報告する。

## 2. 本研究

本研究では、大学における多読を取り入れた授業の効果を、多読を行わないグループと比較することにより検証した。

### 2.1. 研究方法

#### 2.1.1. 被験者

大阪府立大学看護学部で英語の授業を受講している1年生4クラス、計124人が対象となった (表1)。実験群として4クラス中2クラス (54人) に多読を導入し、対照群として残りの2クラス (70人) には多読を課さなかった。

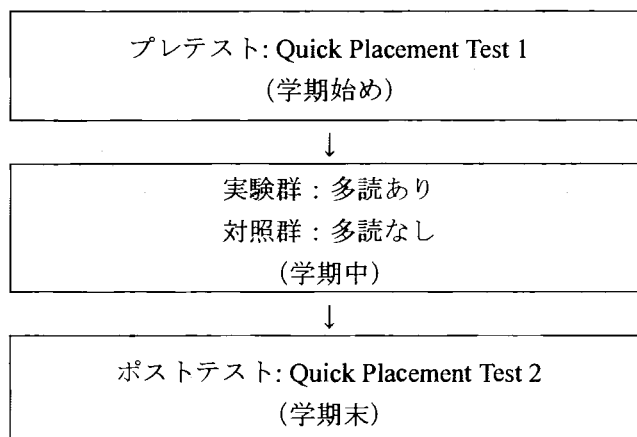
表1. 本研究の被験者

クラス	学 年	多読の有無	人 数	群タイプ
1	1	無	43	対照群
2	1	無	27	( $n = 70$ )
3	1	有	28	実験群
4	1	有	26	( $n = 54$ )

## 2. 1. 2. 研究計画

本研究は2008年10月から2008年12月にかけての1学期（後期）に実施された（図1）。まず学期始めにすべての被験者にプレテストを実施し、その後学期中に、実験群は多読を行ったのに対し、対照群は多読を行わなかった。そして、学期末に両グループにポストテストを実施した。

図1. 本研究のデザイン



テストに用いられた *Oxford Quick Placement Test* (UCLES, 2004) は、英語のクラス分けを目的に開発された英語習熟度テストである。学習者のリーディング、ボキャブラリー、文法能力を評価する60問の多肢選択問題より成り、満点は60点である。その得点に基づき、初級から上級までの7段階の習熟度レベルに分けられる。本テストには、同タイプの問題から成る、難易度が同等なVersion 1とVersion 2があるが、今回はVersion 1をプレテストに、Version 2をポストテストに使用した。

次に、学生が学期中に実際どのように多読を行ったかを述べる。学生は教室外の課題としてオックスフォード、ケンブリッジ、ペンギン、マクミラン社から出ているグレイディッド・リーダーズを中心に多読を行った。グレイディッド・リーダーズとは、英語学習者に、使用語彙や文型の難易度によってレベル別けされた（レベル1～6）スリラー、恋愛小説、推理小説などの読み物であり、レベル1、2は、6,000語ぐらいから成る40ページほどのペーパーバックが中心で、レベルが上がるにつれて語数、ページ数とも多くなる。学生は、1週間に1冊（以上）のペースで読み進めるよう指示され、1学期で最低10冊、7万語を読むことが課された。学生は1冊読むごとにブックレポート（英語または日本語）を提出し、読書記録シートにタイトル、総語数などを記入していった。各本の総語数のリストがあらかじめ配付されており、学生はそれを参照した。授業の前後に本の貸出、返却が行われた。また、大学図書館にも主要なグレイディッド・リーダーズは揃っており、そちらを利用することも奨励され、実際に利用する学生も多かった。ほとんどの学生は、1週間に1冊以上のペースで読み進め、学期末にポストテストが実施された時点で、多くの学生が10冊、7万語のノルマをクリアしていた。まだノルマを達成していなかった学生も

それに近いところまで来ており、最終的にはノルマを達成して学期を終えた。

実験群、対照群の学生とも、教室内では同一の教師（first author）による同内容の授業を受けた（映画を教材としたリスニング、スピーキング中心の授業）。教室外の課題として、実験群が多読を行ったのに対し、対照群には（実験群には課されなかった）ライティングの課題が与えられた。この課題は3週間に1回ほどの割合で4度課され、内容は、与えられた語句を用いたstory writing、笑い話のstory retelling、映画の内容のサマリーなどであった。このデザインにより、多読グループに優位性が見られた場合、それは単なる英語に触れる時間の差ではないと言える。

このように、本研究は対照群を含んでいたため、実験群と対照群に違いが観察された場合、それは多読の効果であると推定できる。

## 2.2. 結果

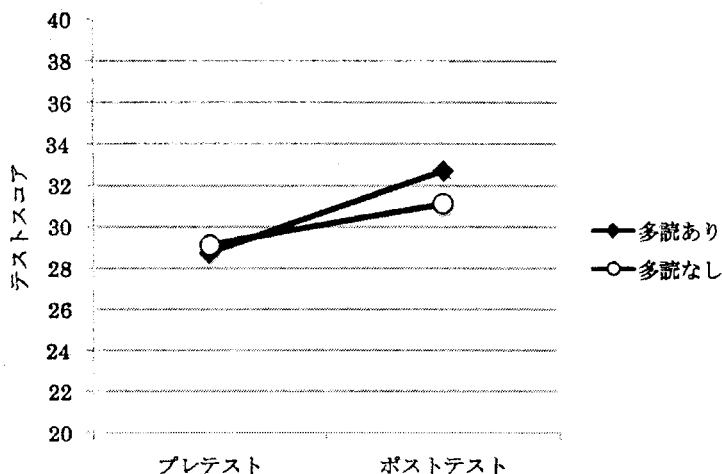
まず、実験群と対照群のプレテストの得点を比較するため  $t$  検定を行ったが、有意差は認められなかった ( $t(122)=0.45, n.s.$ )。よって、プレテストの時点で両群の英語習熟度は同等であったと見なすことができる。各グループのプレテストとポストテストの得点を表2に示す。そして、その結果をグラフにしたものを図2に示す。

表2. Oxford Quick Placement Testの得点の推移

群タイプ	人数	プレテスト	ポストテスト
実験群	54	28.74 (4.70)	32.70 (4.75)
対照群	70	29.13 (4.90)	31.09 (4.67)

注：( ) 内は標準偏差

図2. 各グループにおけるテストスコアの伸び



この結果から、両グループにテストスコアの伸びが見られたことがわかるが、その伸びは多読を行った実験群の方がやや大きいようである。グループ（多読あり vs. 多読なし）とテスト（プレテスト vs. ポストテスト）を独立変数として、繰り返しのある2要因の分散分析を行った結果、グループの主効果は有意ではなかったが ( $F(1, 122)=0.70, n.s.$ )、テストの主効果は有意であり ( $F(1, 122)=43.58, p<.001$ )、グループとテストの有意な交互作用も得られた ( $F(1, 122)=5.00, p<.05$ )。この結果は、多読の有無に関わらず、両グループとも1学期間の英語の授業により習熟度が伸び、その伸びは多読を行ったグループの方が大きかったことを示している。

### 3. 考 察

1学期間の英語授業により、実験群と対照群の両方に英語習熟度の伸びが見られた。さらに、多読を導入したグループは、多読を行わなかったグループよりテストスコアの伸びが大きかった。このことから、両グループとも1学期間の英語授業で英語力が伸びたが、実験グループは、多読を行ったことにより対照群よりも大きく伸びたと言える。稲垣・稲垣 (2008) では、同様の研究で対照群を設けなかったため、観察された習熟度の伸びが多読の効果であると断定できなかった。しかし、本研究では、通常の授業活動の効果とは別に多読の効果を特定できたため、多読の効果のより確かな証拠が得られたと言える。

反論として、多読に限らず、追加の活動を行った実験群が、それを行わなかった対照群よりも勝っていたのは当然ではないかというものが考えられる。しかし、これは多読の効果があつたことを否定するものではない。さらに、本研究では、対照群にも実験群にはない追加活動（4度のライティング課題）が課されていたことを考慮すれば、両グループの差は、単に活動の有無を反映したものではないと言えよう。

最後に、今後の研究課題を述べる。まず、読んだ量（語数）と得点の伸びの相関を見る必要がある。これにより、より直接的に多読と習熟度の伸びとの関係を検証できるであろう。加えて、さらに長期（1年、2年...）に渡る多読の効果を検証する必要がある。多読は、本来、速効性を求めるものではなく、自分のレベルや関心に合ったものを楽しんで読む活動である。よって、苦痛なく続けられる活動であり、その最大の強みは長期的効果にあると考えられる。今後さらにこの二点を調査してゆきたい。

### 謝 辞

本研究は、平成21年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「英語多読授業の短期的、長期的効果に関する実証的研究」（課題番号：21520586）の助成を受けて行った。この場をお借りして謝意を表したい。

### 参考文献

- 酒井邦秀 2002.『快読100万語！ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫。  
古川昭夫・河手真理子 2003.『今日から読みます英語100万語！』日本実業出版者。  
Day, R. R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2008). 「日本の大学におけるグレイディッド・リーダーズを用いた英語多読授業の効果に関する実証的研究」『言語と文化』第7号, pp. 41-49, 大阪府立大学総合教育研究機構.
- 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2009). 「英語多読授業の効果—ミシガンテストのセクション別得点の伸びから—」『言語と文化』第8号, pp. 35-43, 大阪府立大学総合教育研究機構.
- Inagaki, S. (2005). How long does it take for Japanese speakers to learn English? *The Language Center Journal*, 4, 19-29. Osaka Prefecture University.
- Krashen, S. D. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.
- UCLES (University of Cambridge Local Examination Syndicate). (2004). *Quick Placement Test*. Oxford: Oxford University Press.
- Waring, R. (2000). *The Oxford University Press Guide to the 'why' and 'how' of using graded readers*. Oxford University Press, Japan.